



開校式当日 — 昭和27年3月25日式直後図書館前にて名古屋大学勝沼精藏学長、愛知学芸大学内藤卯三郎学長と共に恩師全員の記念写真
 (『岡崎高等師範学校五十年誌』より)

おわりに

本書では、岡崎高等師範学校について述べてきました。同校は、戦時体制下に創設され、終戦を経て、戦後の学制改革によって新制名古屋大学に包括されたのち、一九五二（昭和二七）年には七年度の足跡を残して廃止されました。

岡崎高師同窓会である黎明会が一九七七年に刊行した『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』には、黎明会の加藤貞夫会長による次のような「序文」が掲載されています。

敗戦間近かの昭和二〇年、岡崎市に誕生したが束の間、空襲での戦火に借用校舎も焼失

した。学校創立と同時に受難の第一歩が始った。その年の暮れには、第二の故郷豊川市へと放浪の旅も始っていた。豊川での校舎は、旧豊川海軍工廠の工員養成所とその寄宿舎であった。やつと学校らしい形態が整いかけると、六三制の学制改革が進んできた。苦悩の末、創設七年にして名古屋大学へ発展的に解消したのである。豊川市における岡崎高師の跡は、その後一大変容をしている。当時は松林に囲まれた、緑の多い所であった。いまはもう昔日の面影はない。……岡崎高師なき跡は、時代と共に大きく変化をしている。そこに住む人々にはかつてここに岡崎高師があったことには無関係であろうし、最近発刊された豊川市史にすら、岡崎高師について一行の文字すらない。短命の仮住まい、しかも放浪の果てでは止むを得ないかも知れない。それだけに、岡崎高師をまぼろしにしないための努力は本書の目的の一つである。

（加藤貞夫「序文」『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』）

本書は、名大史ブックレットとして、新制名大に包括された岡崎高等師範学校について取り上げました。当然のことながら、限られた紙数のなかで、岡崎高師のすべてを描くことはできません。しかし、きわめて不十分ながらも本書を通して、激動期のなかで生まれ、消えていった岡崎高師という存在が今日の名古屋大学の礎石の一つになっているということを再確認

してもらえたのではないかと思います。

引用文献・主要参考文献

- 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二（名古屋大学、一九九五年）
- 岡崎高等師範学校五十年誌編集委員会編『岡崎高等師範学校五十年誌』（黎明会、一九九九年）
- 金沢大学創立五〇周年記念事業後援会写真集編集委員編『金沢大学 写真で見る五〇年』（同大学創立五〇周年記念事業後援会、一九九九年）
- 金沢大学五〇年史編集委員会編『金沢大学五〇年史』通史編（同大学創立五〇周年記念事業後援会、二〇〇一年）
- 校誌発行委員会『岡崎高等学校誌』（岡崎高等師範学校学生会、一九五〇年）
- 黎明会『岡崎高等師範学校―創立三十周年誌』（黎明会、一九七七年）

著者略歴

山口 拓史（やまぐち たくじ）

一九六二年 兵庫県生まれ

一九九四年 名古屋大学大学院教育学
研究科博士課程（後期課程）単位取得

退学

現在 名古屋大学史資料室助手

専攻 高等教育史

名大史ブックレット⁸

岡崎高等師範学校

——新制名古屋大学の包括学校③——

二〇〇四年三月三十一日 第一刷発行

著者 山口 拓史

編集発行

名古屋大学史資料室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

電話 〇五二（七八九）二〇四六

印刷所 株式会社 ク イ ッ ク ス

〒456-0004 名古屋市熱田区桜田町一九一二〇

電話 〇五二（八七二）九一九〇



表紙写真：岡崎高師校門付近
(社会科2回生の澤口友彌氏が1997年に描画)